



平成元年に想う

中部電力株式会社 取締役副社長 長澤和夫

新しい元号の初年度という記念すべき技報の巻頭を拙文で飾らして頂くことは誠に光栄の至りです。

最後の昭和となった六三年度は思いがけない好況で電力需要も予想を遥かに越え、三年程前聲高に叫ばれていた円高不況もどこ吹く風という状況でした。昭和を振り返りますと当初の二十年間はさておき、戦後の四十年は戦災復興から高度経済成長へと奇跡と言われる成長を遂げ、戦後食糧援助さえ受けていた日本が世界の債権国となったのは二次産業のすばらしい発展によってであります。私共電気事業も潤沢なエネルギーの供給を目指して設備の拡充に努め、今や量は勿論、質つまり世界一の信頼度を誇る系統を構成することが出来たのも、貴社を始めとするメーカー各社の並々ならぬ努力の賜と感謝している所であります。先日中国の電機工程学会（日本の電気学会に相当）の招待で北京で一寸お話をした時に、日本ではお客様一軒当り事故による年間平均延停電時間が十分程度と申上げたら、未だに電力不足に悩む中国の方々は嘆息をあげて居られました。

さて平成時代はこの豊かな時代から始まります。国が豊かになるにつれて二次産業から三次産業へと移行してゆくと言われますが、国の経済発展の本はやはり二次産業ではないでしょうか。勿論その内容は変化して参ります。一業種で三十年以上繁栄する業種は少ないといわれる位激しく変動する世の中です。時代の先を読む経営判断とそれに対応する新しい技術、新しい製品の開発とが車の両輪となって企業を支えることとなります。

今チェルノブイリ以降の原子力に対する不安の広がりから、いわれなき理由による反原発運動も盛んですが、地球規模の環境論議の高まりによって必ず見直される時が来るでしょうし、又将来熱源が次第に電気に移行してゆくことも間違いのないことと思います。私共も遠い将来を見据えて、新しいエネルギー源の利用や、需要側のみでなく供給側でのロードカーブの平準化などにも眞剣に取り組んでゆかなくてはなりません。しかしながら電気事業も電気だけの単一商品では発展に限界があります。ようやく通信関係事業のよちよち歩きを始めた所ですが、更にもう一歩進めて総合エネルギー産業として、更には総合地域産業として多角化を考えてゆかなければならないと思っております。

今年名古屋で電灯供給が始まって百周年です。これからの百年に向けての企業としての方向性を模索してゆくことが、今事業に従事している私共の務めといえましょう。

変圧器修理から始まった愛知電機は家庭電器品やシステム関係迄広い分野に発展して来られましたが、これからどういう分野に進出し、どういう道を歩まれるかは皆さん方の今後の大きな課題です。しかしとりあえずは電気事業と共に手を取り合って社会に貢献してゆくこととなりましょう。皆様の御活躍を期待しております。